

5-4			
主題	入居者の声から一人ひとりの特技を活かした自立支援とその効果		
副題	～「昔取った杵柄」から生まれる仲間の輪～		
キーワード1	ケアの質の向上	キーワード2	自立支援
研究期間	12 ヶ月		

法人名	社会福祉法人園盛会		
事業所名	特別養護老人ホーム 多摩の里むさしの園		
発表者：	藤崎梓沙・神川大地	アドバイザー：	なし
共同研究者：横山純一・野村美鈴・原島良江・小澤幸子・高井茉優・佐藤夏織			

電 話	042-555-8151	FAX	042-555-8152
-----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	平成 10 年に開設した定員 150 名の特養です。ユニット型の 2 ユニット定員 18 名の地域密着型特養も併設しており、建物の特徴を活かした 25 名単位のブロックケアとユニットケアという、それぞれの特色を活かした 2 種類のケア体制の中で、ご入居者の「その人らしさを大切に」した支援の提供に努めています。
------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》 本研究前の状況と課題として ・ご入居者の希望に沿った余暇活動が十分に実施出来ていなかった。 ・ご入居者同士の会話の中で、「おやつを作りたい。」や「私に何か手伝えることはないですか。」等の声が聞かれていたが、応えることが出来ていなかった。 ・生活全般や余暇活動に消極的なご入居者がいた。 ・新しく入居され、ユニット内の環境に馴染めないご入居者がいた。 上記の 4 課題を踏まえ ひとつの目的（おやつを作る）に皆で取り組む事で、ご入居者間の良好な関係構築と生活の中での楽しみを通して、一人ひとりの活性化を目指し、本研究に取り組む事とした。 《2. 研究の目的ならびに仮説》 目的 ① ご入居者同士の交流の増加と関係強化。

② 「相談～決定～調理～食事」といった家庭での生活と同様の流れを汲む事で、誰でも気軽に参加できる場の提供と実施機会の定着を図る。 ③ ご入居者の新たな一面を引き出し、共有する事で、日常生活における個別ケアや役割の提供等に繋げる。 仮説 ・ご入居者が積極的に意見や要望を伝えられるようになり、より希望に沿った余暇活動が実施できるようになる。 ・本研究を通して、消極的な方や新しく入居された方も自然と輪に入れ、円滑・良好な馴染みの関係が構築される。 ・本研究からご入居者の新たな一面を抽出し、更なる個別ケアへと繋がる。 《3. 具体的な取り組みの内容》 ① H26.5 居室担当者から全ご入居者を対象に聞き取りを実施。その後、結果を踏まえ、ユニット会議で具体的な実施方法や

内容（メニュー等）を協議・決定する。

- ② 「個別援助表」を作成し、ご入居者ごとの要望や特技等（できること）を職員間で共有する。

- ③ 月に 1～2 回、ご入居者の知恵や力を借りながら、職員と共に調理を行う。

（梅干し、干し芋、心太、おはぎ、白菜漬
け、クッキー、豆腐作り等）

※材料費：各回 1500 円程度。

- ④ H27.4 ご入居者より「野菜を作ってみてはどうか。」との提案があり、ユニットの一部を活用して野菜作りを開始する。同時に、「観察日誌」をご入居者に書いていただき、収穫までの過程も楽しめる機会を作る。（プランターを使用し、ミニトマト、ナス、胡瓜の苗を植え、活動を開始する。）

※参考文献は、職員が地域の図書館より借りる。

※費用：苗・種・肥料等、計 7000 円程度。

- ⑤ 四季を感じていただく為に、野菜だけでなく、朝顔等の花も栽培を開始する。収穫が可能になった野菜は、ご入居者に収穫していただき、「手作りおやつ」に使用する。（胡瓜や朝顔は園芸用ネットを設置し、栽培する。）

※費用：園芸用ネット他、計 4000 円程度。

- ⑥ H27.6 より家庭での環境に近づける為、ご入居者と一緒に買い物に出掛けた後、調理～食事という流れを実施する。（購入先は地域の農産物直売所を利用。）

※その他、行き先は 5 ヶ所の中から、買い物の目的等に合わせて利用する。（片道 10 分、車への乗降等も含めて 1 時間程度。）

《4. 取り組みの結果》

- 今回の取り組みを通して、昔を思い出し、懐かしみながら実施できたことで、自然と会話も広がり、ご入居者同士の交流が活発になった。

- 職員が、ご入居者から作り方を教わる場面が多く見られ、取り組みを通じてご入居者との関係が深まった。

- 新しく入居されたご入居者は、他入居者と交流する機会が増えた事で、馴染みの関係の構築に繋がった。

- ご入居者の中に、昼夜逆転傾向の方や帰宅願望等の不安を訴える方がいたが、本研究を通して、徐々に生活リズムの改善や訴えが消失していき、心身の安定に繋がった。

- ご入居者それぞれの新たな一面や特技（できること）を抽出・把握出来た事で、より一人ひとりの強みを生かした個別ケアが提供できるようになった。

《5. 考察、まとめ》

本研究によって、ご入居者自身が昔の想いや記憶を辿り、ユニットの中での自分の居場所や一緒に生活する仲間とのコミュニティを自らの力で開拓・構築する支援が出来た。

また、私達職員が日頃の生活環境において「家庭での生活（過去）」と「施設での生活（現在・未来）」との境界線を少しでもなくすことで、ご入居者が「その人らしく」生活できるのだという事が再確認できた。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- 「簡単な野菜づくり」

グラフ社 藤巻あつこ 著

《8. 提案と発信》

「自己決定」「生活の継続性」「個別ケア」等に配慮しながら、「介護が必要な状態での『ごく普通な生活』とは何か。」を時代の流れを敏感に察知しながら、業界全体で変化していく事でより良いケアの提供に繋がるのではないかと考えます。